

はじめに

1. 本資料のⅠは、ソ連型計画プロセスの記述的模型分析を深めることを試みたアメリカ合衆国の経済学者の論文

M. Manove, "A Model of Soviet-Type Economic Planning," *American Economic Review*, 61, no.3, part.1, 1971: 390-406

の翻訳である。本論文は、レオンチェフ・モデルの利用によるソ連型計画法=物財バランス法分析の古典的業績 (Montias - Levine モデル) に1種のラチェット効果を導入することによって、ソ連型計画法を具体化し、さらにその「頑健さ」を論証しようとしている。官僚的資源配分が、動学的にみると、一般にゼロ査定ではなく前年度実績主義にもとづいているということは、その分析にとってはなほ重要だということはいうまでもないであろう。Manove のモデル分析には、投資問題が明示的に考察されていないためにラチェット効果の取扱いが不明瞭だという問題がはらまれているが、Manove 論文がラチェット効果導入の重要性を批判的に指摘した先駆的な業績としてだけでなく、不均衡論の1つの基礎を形成している業績として高く評価されるべきだと考えられる。

2. 本資料のⅡには、ソ連型資源配分プロセスの「合理化」と「改善」とを日指すソ連の数経学者フルツキーとゲロニムスの共同論文

Е. А. Хруцкий, В. Л. Геронимус. Проблемы оптимизации планирования материальнотехнического снабжения. «Экономика и математические методы» Том X, Вып. 3, 1974: 505-520.

の翻訳が収録されている。この論文は、財の集計レベルの相違を導入することによって、ソ連の計画編成プロセスをモデル複合体としてより具体化し、その実際の改善に迫ろうと試みている。aggregationの問題を明示的に取扱うことを意図している点において、ドゥートキン・グループと問題意識を共有している。ドゥートキン等の方が着想、数学的内容、経済学的インプリケーションのどれをとってみても秀れているが、フルツキー=ゲロニムス論文はソ連型計画方式の枠内での「改革」モデルとして重要な意義をもっていると考えられる。この論文の詳しい解説とコメントはⅢで与えられているので、ここではこれ以上立ち入る必要はないであろう。

3. 本資料の編集は久保庭真彰(一橋大学経済研究所)が担当し、そのインストラクションのもとに田畑伸一郎(一橋大学大学院経済学研究科博士課程)がⅠ,Ⅱを翻訳し、Ⅲを執筆した。

1984年4月

久保庭 真 彰